

理解度&釣れる度100%

丸

マルキュー

優良 餌本



パワーエサ バッグブック



バッグに
一冊入れて
おこう!



Contents

- 02 ウドン系くわせエサの使い分け
- 04 ウドンセットの浅ダナ釣り
- 03 ウドンセットのチョーチン釣り
- 12 段差の底釣り
- 13 両グルテンの宙釣り (新べらねらい)
- 22 両ダンゴの底釣り (早春)
- 23 グルテンセットのチョーチン釣り (早春)
- 32 両ダンゴの浅ダナ釣り (早春)

The target period 12月～5月

2025 冬春 号

HERA BAIT POWER BOOK

ウドンセットの浅ダナ釣り・チョーチン釣り、段差の底釣りなど、冬のセット釣りではくわせエサに“ウドン”を使うことが一般的です。そしてウドン系くわせエサにはいくつかの種類があります。なぜ何種類もあるかというと、釣り方や魚の活性によって釣れたり釣れなかったりの差がでるからです。基本的な考え方はくわせエサの重さです。渋いときは軽く、活性があると重くが一般的。ここでは、いくつもあるくわせエサの特徴や使い分けをまとめましたので参考にしてください。

●ウドンセットの浅ダナ釣り



●ウドンセットのチョーチン釣り



●段差の底釣り



「さなぎ粉」漬けの
作り方はコチラ↓



「カ玉」 「カ玉大粒」



瓶詰め状態で購入でき、そのままハリに付けて使える便利なくわせエサ。エサ持ちをよくするために「さなぎ粉」漬けにするのが主流。

「カ玉ハード」 シリーズ

ビンから取り出して、そのまま使える粒状くわせエサ「カ玉ハード」シリーズは、そのエサ持ちの良さが最大の特徴。(S) (M) (L) と3サイズがラインアップされ、釣り方に合わせた使い分けが可能。



↑ 漬け込み方法
はコチラ

「カ玉ハード」シリーズを「つけ込みにこれだ!! ソフト」で漬け込むことで、エサが若干しまりハリ抜けしにくくなります。また、あざやかな黄色に着色できるのでノーマルの白とのカラーローテーションが可能。



サの

←強

ネバリ（粘着性）

弱 →

↑
輕

重さ

重
↓

活性時に数を釣る定番釣法

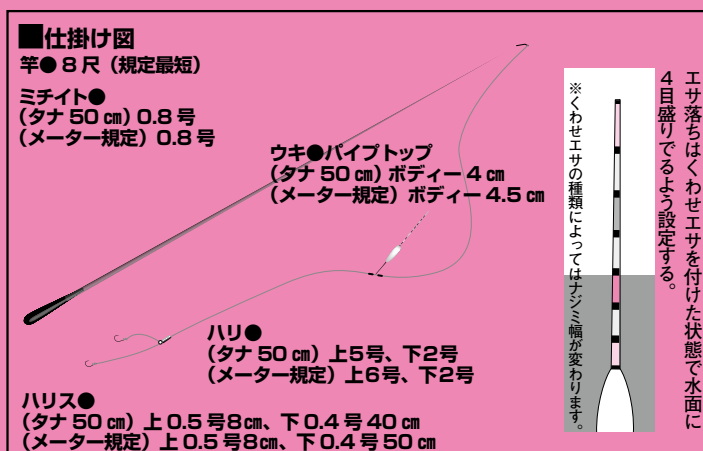
ウドンセットの 浅ダナ釣り

釣り方の基本

へら鮒の活性が下がる晩秋～春先に効果的な釣り方がウドンセット釣りです。魚は積極的にエサを追わなくなり、ダンゴエサの芯に飛びついてくる魚は少なくなります。バラけた粒子にゆっくり寄ってくるようになります。ですから、このバラけた粒子に寄ってきたへら鮒にくわせエサを食わせるセット釣りが有効なのです。活性時とはいえバラケエサをたくさん打って魚を寄せるのではなく、自分が釣るタナに言葉どおり集魚しなくてはなりません。それには正確なエサ打ちと、バラケエサがバラけすぎないようにすることがコツです。元々バラケエサはバラけやすい性質ですが、これを確実にタナまで持たせることが重要なのです。ですから、バラケエサの重さがウキにしっかり掛かり、打ち始めはウキのトップが沈没するぐらいにエサを持たせます。魚が寄ってくれば少しずつナジミが少なくなります。すると、自然とエサ持ちがあまくなることで自分のタナに集魚できなくなるので注意しましょう。

タックルセッティング

竿はエサ打ちのコントロールがしやすく、手返ししやすい釣り場規定の最短の長さを選びます。冬の釣りでは、まずウキが動くようセッティングしますので、極端に大きなウキは使わず、また下ハリスは長めからスタートします。



まとめやすくエサを持たせやすい！

●バラケブレンド

「粒戦」50 cc+

「とろスイミー」50 cc+

水 150 cc

「セット専用バラケ」100 cc+

「ふぶき」100 cc+

「BB フラッシュ」100 cc

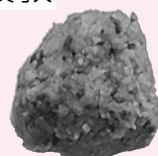


●作り方

「粒戦」50 cc、「とろスイミー」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。吸水させるために10分ほど放置する。そこへ「セット専用バラケ」100 cc、「ふぶき」100 cc、「BB フラッシュ」100 ccを入れ、20～30回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝6号

●くわせエサ

「力玉ハード(S)」

「力玉」の「さなぎ粉」漬け



「さなぎ粉」漬けの
作り方はコチラ↓



ウドンセットの浅ダナ釣りのくわせエサは「力玉ハード(S)」か「力玉」の「さなぎ粉」漬けがおすすめ。落下の仕方や重さの違いでアタリ数に差がでることも多いので、上手く使い分けてみよう。

●タナを深くする

しばらくエサ打ちしても何の反応も得られないときは試しにタナを深くしてみよう。特に厳寒期になるとへら鮎は上層に上がってこないこともある。たとえメーター規定のある釣り場でも1mのタナで釣らなくてはいけないことはないので、1.3mや1.5mと少し深いタナを狙ってみよう。

●ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めにしている(タナ50cmで40cm、メーター規定で50cm)。これでアタリが多くでて、空振りやイトズレなどが目立つときは5cm詰めてみよう。それでも空振りが多ければさらに5cm詰めていく。もしハリスを詰めてアタリが減るようなら元の長さに戻すこと。動きが減ってしまうより動きがあるほうを優先したい。

●ハリを使い分ける

くわせのハリを換えることでアタリ数に差がでることがあります。号数でもいいですし、重さの違いで使い分けてもいいでしょう。アタリが少ないときは軽いもの、動きが多いときは重めにすると覚えておきましょう。

●上手く釣れないときは……

サワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、浅ダナが成立しない状況と判断します。タナの違う釣り、チョーチンセット(8ページ)や段差の底釣り(12ページ)に切り替えよう。

ウドンセットの浅ダナ釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることは難しいのです。あまりエサをいじるなどと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてエアーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けしてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくい。

時合を作りやすく安定して釣れる

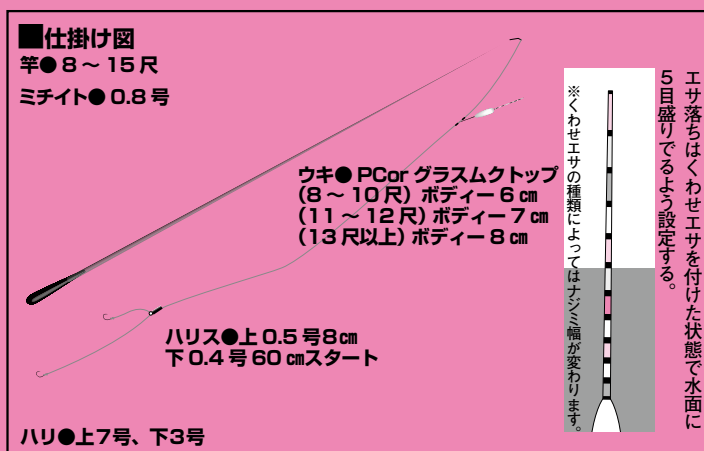
ウドンセットの チョーチン釣り

釣り方の基本

寒くなるとともに水温が下がるとへら鮒の活性は落ち、比較的水温の安定した層にじっとしていることが多くなります。そうすると浅いタナではなく、深いタナを狙うチョーチン釣りの出番です。エサ打ちやタナのコントロールが難しい浅ダナにくらべ、一定のポイントにエサが打てるチョーチン釣りは時合を作りやすく、安定して釣れるメリットがあります。チョーチン釣りも浅ダナ同様、自分が釣るタナにへら鮒を集めなくてはなりません。ですから、バラケエサの重さがウキにしっかり掛かり、打ち始めはウキのトップが沈没するぐらいにエサを持たせます。次第に魚が寄ってくるとナジミが少なくなってきますが、その場合はエサをしっかり付けて同じナジミ幅をキープするよう心がけます。また、この釣りでは縦誘いを活用します。バラケエサが持ちすぎたとき、バラケエサが抜けてくわせエサだけになったとき、竿先を持ちあげるように縦誘いをしてみましょう。これに反応してアタリがでることも多いのです。

タックルセッティング

竿の長さは水温が下がれば下がるほどへら鮒が下層へ下がるので長くなります。短い竿で動きが少ないときは迷わず竿を長くしましょう。



短竿向き微粒子ブレンド

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc+

「粒戦細粒」50 cc+

水 200 cc

「ヤグラ」100 cc+

「ふぶき」300 cc+

「バラケマッハ」100 cc



+



+



+



+



+



●作り方

「粒戦」100 cc、「粒戦細粒」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注ぐ。吸水させるために10分ほど放置する。そこへ「ヤグラ」100 cc、「ふぶき」300 cc、「バラケマッハ」100 ccを入れ、20～30回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。

ウドンセットのチョーチン釣り

実釣基本テクニック



「さなぎ粉」漬けの
作り方はコチラ↓



●くわせエサ

「カユハード (M)」

「カユ大粒」の「さなぎ粉」漬け

ウドンセットのチョーチン釣りのくわせエサは「カユハード (M)」か「カユ大粒」の「さなぎ粉」漬けがおすすめ。落下の仕方や重さの違いでアタリ数に差がでることも多いので、上手く使い分けてみよう。

●竿の長さでタナを探る

短い竿で釣れるほうが釣りは簡単です。ですが、厳寒期になるとへら鮒はなかなか上層には上がってきません。サワリ、アタリなどウキの動きが少ないときは、迷うことなく竿を長くして深いタナを探ってみましょう。1尺違っただけでアタリ数が増えることもよくあります。

●ハリを使い分ける

くわせのハリを換えることでアタリ数に差がでることがあります。号数でもいいですし、重さの違いで使い分けてもいいでしょう。アタリが少ないときは軽いもの、動きが多いときは重めにすると覚えておきましょう。

●上手く釣れないときは……

竿の長さを換えたり、ハリを換えてもサワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、宙釣りが成立しない状況と判断し、底をねらう段差の底釣り（12ページ）に切り替えましょう。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝7号

タナまで持つ中竿（13尺以上）向きブレンド

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc+

「とろスイミー」50 cc+

水 200 cc

「ヤグラ」100 cc+

「ふぶき」300 cc+

「セットアップ」100 cc



●作り方

「粒戦」100 cc、「とろスイミー」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注ぐ。吸水させるために10分ほど放置。そこへ「ヤグラ」100 cc、「ふぶき」300 cc、「セットアップ」100 ccを入れ、20～30回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。

厳寒期の切り札

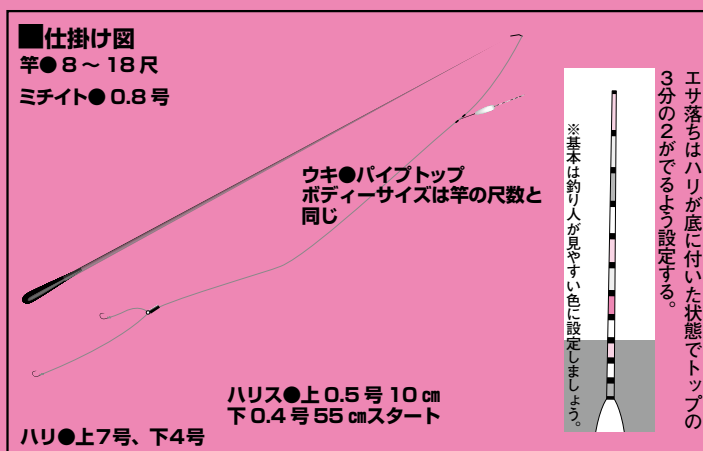
段差の底釣り

釣り方の基本

年を越して2月ぐらいまではへら鮒の活性が最も低下する時季です。こうなるとへら鮒はエサを追って宙層を泳ぐことが減り、底近辺でじっと動かなくなります。この厳しい厳寒期の切り札的釣り方が段差の底釣りです。バラケエサを底にためることでへら鮒を底に寄せて釣っていきます。ですから、バラケエサが落下中に抜けてしまったり、拡散範囲を広げすぎないことがポイントになります。浅ダナやチョーチン釣り同様、しっかりとバラケエサの重さでウキのトップがしっかりナジむことが大前提です。ナジミが少なくなると次第に魚はウズってしまい、イトズレなどの動きはありますが、肝心の食いアタリがでなくなります。そしてもうひとつ重要なのが、くわせのウドンが必ず底に着いていること。そのためにもタナ取りは重要なので慎重に行ないます。また、おかしいなど感じたらすぐにタナを測り直して確認することです。

タックルセッティング

竿の長さは水深に合わせてます。ウキの位置がチョーチンになるほうが釣りやすく、中途半端にあまったり、穂先との距離が近すぎても釣りづらいので注意しましょう。



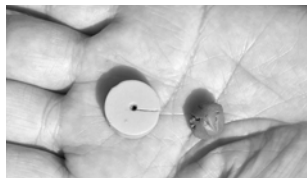
タナ取り方法

① 宙の状態のエサ落ちを確認

上下両方のハリを付け、宙釣りの状態のエサ落ちを確認する。

② タナを測る

下バりにタナ取りゴムを付け、ウキにフロートを差して水深を測る。普通に打ち込んだだけでは沖を測ってしまうので、ウキを持ちあげるように竿先をあげ、ウキの下にタナ取りゴムがくるようにする。トップ先端が水面にでる位置にウキをセットする。このとき、左右の水深も測っておくこと。



タナ取り時は、フロートとタナ取りゴム（粘土オモリ）を使うと素早く測ることができる。

③ ウキをズラす

水面にでたトップ先端の位置に合わせてミチイトに目印のトンボを付け、その位置に宙で決めたエサ落ち目盛りを合わせる。これが下バリトントンといわれる設定だが、これでは下バリが底から切れる可能性が高いので、ここから5cmウキを上へ動かしてスタートする。

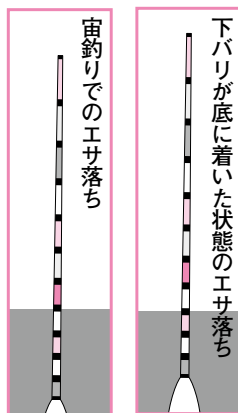


目印のトンボを基準にしてウキの位置を動かす。

④ 下バリが底に着いた状態のエサ落ちを確認

ウキをズラしたらエサを付けない状態で打ち込み、エサ落ちを確認する。下バリが底に着いていれば、下バリの重さがウキにかからないので、宙で確認したエサ落ちより目盛りは多くでる。それが確認できればOK。

仮に宙で決めたエサ落ちを7目盛りだしとすると、下バリが底に着いた状態では7目盛り以上水面にでることになる。ただし、実釣においては水流や底の状態などで必ずこの目盛りがでるとはかぎらないが、7目盛りより沈んで戻ってこない場合はタナをズラす（深くする）かタナを測り直すこと。



●くわせエサ

「力玉ハード(L)」、「力玉ハード(M)」「力玉大粒」の「さなぎ粉」漬け

段差の底釣りのくわせエサは「力玉ハード(L)」か「力玉ハード(M)」、または「力玉大粒」の「さなぎ粉」漬けがおすすめ。落下の仕方や重さの違いでアタリ数に差がでることも多いので、上手く使い分けてみよう。



円柱の形状によりユラユラとアピールしながら落下する。



「さなぎ粉」漬けの
作り方はコチラ↓



●作り方

「粒戦」100 cc、「ダンゴの底釣り夏」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水150 ccを注ぐ。吸水させるために10分ほど放置する。そこへ「ヤグラ」150 cc、「段底」150 ccを入れ、20～30回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

しっかり持ってウキがじんわり上がる

●バラケブレンド

「粒戦」100 cc+

「ダンゴの底釣り夏」100 cc+

水 150 cc

「ヤグラ」150 cc+

「段底」150 cc



●しっかりナジませる

底釣りの大敵でもあるウズズリを防ぐためにも、落下中の動きを抑え、しっかりウキをナジませることが基本です。押し練りでエサを持つように調整するだけでなく、きれいに丸くエサ付けすることで落下中のエサの開きが抑えられます。上手くナジませられないときに試してみましょう。

●ハリス調整

宙釣りとは違い、動きを増やすよりは確実にアタリがでてヒットする長さを目指します。できればスタート時の長さのまま釣りたいですが、極端に渋いときはハリスを長くすることもあります。このときの目安は最長で60cmまで。ハリスの長さでアタリを増やすのではなく、アタリがでるまで我慢して待つぐらいの心構えです。

●くわせエサを使い分ける

段差の底釣りでは、くわせエサが底に確実に着いている状態にしたいので、重さがある「力玉ハード (L)」を基本にします。ただ、底の状態（ヘドロが多くてくわせエサが潜りやすい）や活性が低く吸い込みが弱いときには軽いくわせが有効なこともあります。アタリがでにくいと感じたら「力玉ハード (M)」や「力玉大粒」の「さなぎ粉」漬けも試してみましょう。

●置き直し

流れでシモってしまったり、底の状態でエサ落ち目盛りがでてこないこともあります。そういうときは、竿先を持ちあげてくわせエサを置き直してください。これでアタリがでることも多いです。

●ナジむ途中の動きが多いときは……

厳寒期でも魚が底に着いてなく、底より上にいる状況もあります。ナジミ途中はサワリがあってもそのあと静かならウドンセットのチョーチン釣り（8ページ）を試しましょう。

段差の底釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることはむずかしいのです。あまりエサをいじるなどと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてエアーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つめよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくい。

新べら狙い！

両グルテンの 宙釣り

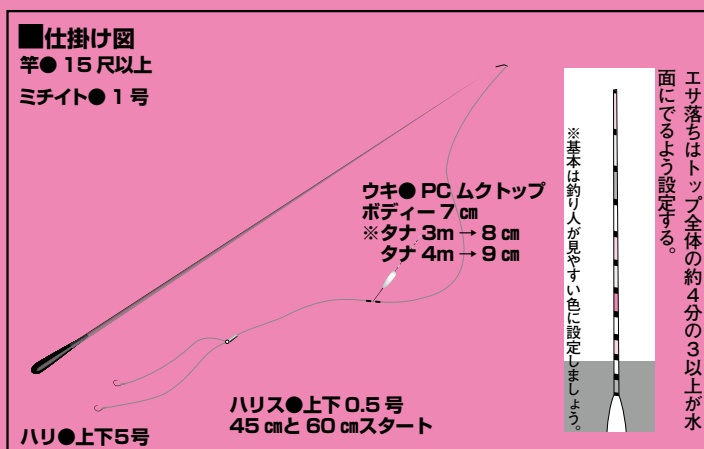
釣り方の基本

秋から年明けまで行なわれる新べら放流。放流された新べらは池全体の手前や奥などに溜まりやすく、沖に着いたり、端にかたまりします。一般的には長めの竿で沖をねらうのがセオリーです。タナは1.5 mぐらいからスタートし、これでアタリが多いようなら浅く、アタリが少ないようなら深くします。そのまま底に付けるのも一手です。とにかく、新べらがいる泳層を見つけるのが一番です。

エサはグルテンが基本になります。集魚力の弱いグルテンを使うのは、新べらが溜まっているエリアを狙うことを前提にしているから。旧べらを寄せず、溜まっている新べらを食わせるという発想です。そして、より自然に新べらを食わせるためにも軽さが特長のグルテンエサが非常に有効になるのです。

タックルセッティング

竿の長さは周囲との兼ね合いで制御できる範囲で選びましょう。振り込みが難しい場合は、仕掛けを短くして対処します。ウキはねらうタナに合わせて大きくしていきましょう。



エサ持ちよく新べらにアピール！

●エサブレンド

「凄グル」50 cc+
「わたグル」50 cc+
「新べらグルテン」50 cc+
水 150 cc



+



+



+



●作り方

「凄グル」50 cc、「わたグル」50 cc、「新べらグルテン」50 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水150 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう20回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。5～6目盛りのナジミ幅ができればOK。それより浅ナジミならさらに押し練りを加える。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝5号

●放流情報

まず知らなければならないのが放流情報。いつ新べらが入って、何トン放流されたかです。もちろん、放流日から近ければ近いほうが確率は高いですし、放流量が多いほうがベストです。放流は1回だけではなく、2回、3回と繰り返しますので、その回数も重要になってきます。情報は池のホームページで告知されたりもしています。ない場合は直接電話で問い合わせましょう。

●竿は長めが◎

フレッシュで食い気のある新べらを狙う場合、沖打ちや外向きを釣るので、必然的に竿は長くなります。これは手前に寄る旧べらを避けるためでもあります。釣り場の規模にもよりますが15尺以上、18尺から21尺を使うのが一般的です。空いているときや放流直後で短竿で釣れるときもありますが、短くても12尺ぐらいまでです。

●振り込みやすくする

ウキは長竿で沖を狙うので、ある程度の大きさ（オモリを背負う）でないと振り込みがしづらいです。少し大きいぐらいでも問題ありません。また振り込みにくい場合は仕掛けを短くしましょう。

●ゆっくりアピール

両グルテンの釣りは、軽いグルテンエサを長めのハリスでゆっくり落とすことで、エサをアピールさせて釣ります。ナジむスピードもゆっくりになります。エサをゆっくり落下させるにはハリもできれば小さいほうがいいでしょう。ただ、肝心のエサが持たなければ意味がありませんので、エサが持たせられる範囲で小さめにします。

●上手く釣れないときは……

両グルテンでウキの動きがおとなしい場合は、新べらが少ない証拠。バラケエサを使ってへら鮎を寄せることができるウドンセットの浅ダナ釣り（4ページ）かチョーチン釣り（8ページ）に釣り方を変更しましょう。

両グルテンの宙釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

グルテンエサはエサ持ちがよいと思われませんが、水に入ると水分を吸って膨らみ魚のアオリが強いときはハリから抜けやすくなります。また、グルテンエサはそのまま使えとも言われますが、エサが持つように押し練りや手揉みでの調整は躊躇せず行ないます。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つけよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

手揉み

つまんだエサを指先で揉むようにして丸めてエサ付け。この手揉みの回数でエサ持ちを調整する。



早春の浅場狙い！

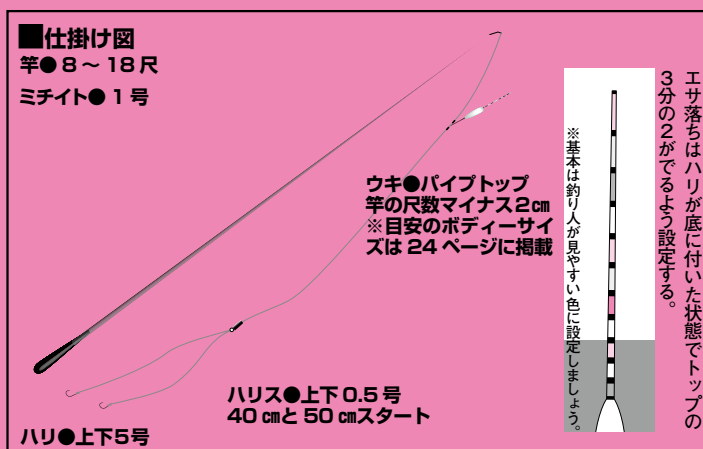
両ダンゴの 底釣り

釣り方の基本

“春は底を釣れ！”という格言があるように、春先になると、底釣りが面白くなります。冬場に深いタナでじっとしていたへら鮒が水温の上昇とともに活性をあげ、徐々に浅いタナへと移動します。この際に、カケアガリを伝えて浅場へと動きますので、春先は底釣りが有効なのです。狙いは浅場なので、短い竿で手前を攻めるか長い竿で沖の底を狙うかになります。これは管理釣り場でも野釣り場でも同じです。この時季のへら鮒は、まだ活性の低い個体もいれば、食い気をだしたやる気のある個体も増えてきます。そういう不安定な活性なので、エサもそれに合わせるように、両グルテンと両ダンゴの中間的な位置付けになるブレンドが効果的です（ブレンドは次頁）。釣り方はいわゆる底釣りですので、正確にタナ取りを行ない、基本どおりエサをしっかりとナジませることを意識してください。

タックルセッティング

沖の底狙いの場合、ウキが小さいとオモリ量が少ないので振り込みにくい。自分が振り込めるオモリ量を背負うウキサイズを選ぶとよい。また、その際仕掛けを短くするとより振り込みしやすくなる。



ダンゴとグルテンの中間エサ

●エサブレンド

「ダンゴの底釣り芯華」150 cc+
「わたグル」50 cc+
水 150 cc



+

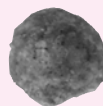


+



エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

●作り方

「ダンゴの底釣り芯華」150 cc、「わたグル」50 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 150 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう20回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。3～4目盛りのナジミ幅ができればOK。それより浅ナジミならさらに押し練りを加える。

●ウキの選択

ウキのサイズは竿の長さ（＝水深）によって変わってきます。竿の尺数ごとの目安を記しましたが、迷ったときは大きめを選択してください。

竿の長さごとのウキのボディサイズ

8 尺	6 cm	13 尺	11 cm
9 尺	7 cm	15 尺	13 cm
10 尺	8 cm	16 尺	14 cm
11 尺	9 cm	18 尺	16 cm
12 尺	10 cm		

●ナジミ幅を意識しよう

底釣りでは、ウキのナジミ幅が重要な情報源です。エサ持ちの有無だけでなく、底が掘れた（ヘドロなどが取れること）、ハリスが絡んだなどを知る手がかりです。両ダンゴの底釣りの場合、3～4目盛りのナジミ幅がでるのが基準です。これよりナジミが少ない場合は、エサが持っていないかタナをはわせすぎていることになります。逆に多い場合は、タナが底から切れている、ハリスが絡んでいる可能性があります。そして寄る魚量が増えても同じナジミ幅をキープできるようにエサを調整（押し練り、手揉み、エサの大きさ）して釣っていきます。

●上手く釣れないときは……

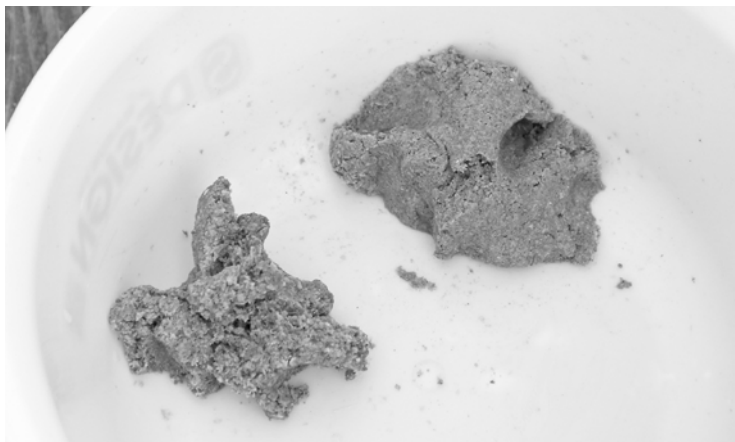
両ダンゴの底釣りでウキの動きがおとなしい場合は、それほどへら鮒の活性が低い証拠。グルテンセット、両グルテンとエサを変えて様子を見ます。それでも動きが少ないときは底釣りを諦めましょう。

両ダンゴの底釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

ダンゴとグルテンと中間エサは、水に入ると水分を吸って膨らみ魚のアオリが強いときはハリから抜けやすくなります。活性の高い魚と低い魚が混在する春先は、活性や寄り具合によって微妙な調整が求められます。エサ付けの圧や大きさも工夫しましょう。



左が基エサ。右が押し練りを何度か加えた状態。押し練りをしてエアーを抜いていくとエサが持つようになる。魚が寄ってナジミが浅くなればさらに押し練りを加える。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



●タナ取り

底釣りはタナ取り（水深を測ること）がすべてといわれるほどタナは重要です。釣りを始める基準であり、地形変化や底の状態の変化（釣っている途中でヘドロやゴミが取り除かれて水深が変わること＝底が掘れた）を知るための唯一の手段です。このタナ取りをおろそかにしては底釣りは釣れません。動画でわかりやすく解説しているのでチェックしましょう。



③ウキをズラす

水面にでたトップ先端の位置に合わせるようにミチイトに目印のトンボを付け、その位置に宙で決めたエサ落ち目盛りを合わせる。これが上バリトントンといわれる設定だが、これでは上バリが底から切れる可能性が高いので、ここから5cmウキを上へ動かしてスタートする。



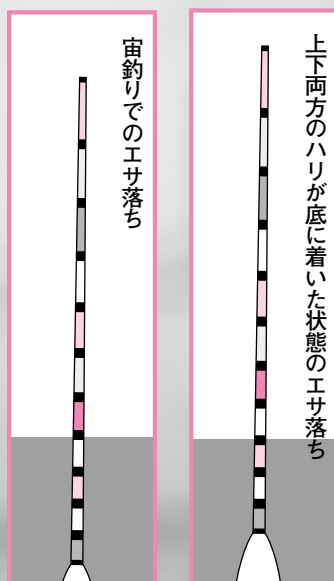
目印のトンボを基準にしてウキの位置を動かす。

④上下両方のハリが底に着いた状態のエサ落ちを確認

ウキをズラしたらエサを付けない状態で打ち込み、エサ落ちを確認する。上下両方のハリが底に着いていれば、上下両方のハリの重さがウキにかからないので、宙で確認したエサ落ちより目盛りが多くでる。それが確認できればOK。

仮に宙で決めたエサ落ちを7目盛りだしとすると、上下両方のハリが底に着いた状態では7目盛り以上水面にでることになる。ただし、実釣においては水流や底の状態などで必ずこの目盛りがでるとはかぎらないが、7目盛りより沈んで戻ってこない場合はタナをズラす（深くする）かタナを測り直すこと。

釣りが可能となります。



バランスの底釣り

【実演】タナ取り方法

【実演】フロートを使用した底釣りのタナ取り方法

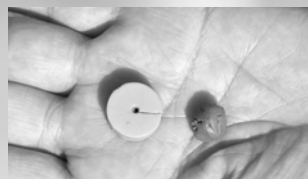
フロートを使用した **実演** 底釣りのタナ取り方法

① 宙の状態のエサ落ちを確認

上下両方のハリを付け、宙釣りの状態のエサ落ちを確認する。

② タナを測る

上下両方のハリにタナ取りゴムを付け、ウキにフロートを付けて水深を測る。普通に打ち込むと沖を測ってしまうので、ウキを持ち上げるように竿先をあげ、ウキの下にタナ取りゴムがくるようにする。トップ先端が水面にでる位置にウキをセットする。この時、左右の水深も測っておくこと。



タナ取り時は、フロートとタナ取りゴム（粘土オモリ）を使うと素早く測ることができる。



タナ取りゴム（粘土オモリ）に上下2本のハリを刺してタナを取る。



タナを取る際は、竿先を持ち上げて実際に釣る位置までタナ取りゴムを寄せて測る。

再生 (k)

より正確なタナ取

早春の野釣り場で有効

グルテンセットの チョーチン釣り

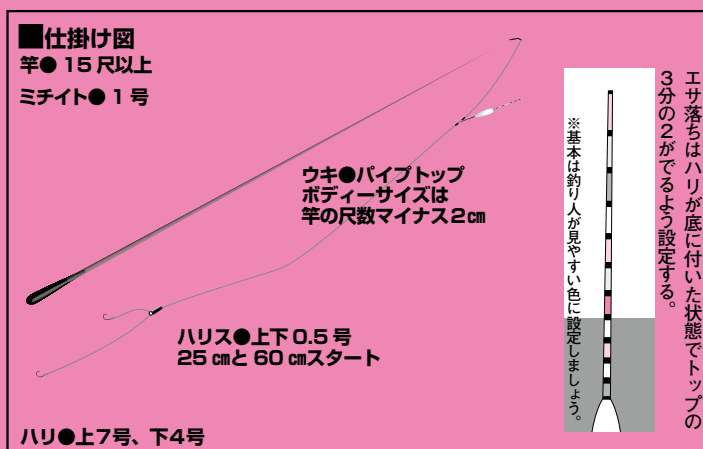
釣り方の基本

グルテンセットのチョーチン釣りは、春先の野釣り場（山上湖や準山上湖）で有効な釣り方です。放流からしばらく経過した頃、また、放流後の口を使わなかった新べらが春先になって食いが立つことがあり、そういうときこそこの釣り方の出番です。水深のある野釣り場がターゲットとなりますので、ボート釣りがメインですが、水深のある栈橋でも有効です。

釣り方の基本はバラケエサをしっかりナジませてへら鮒を寄せ、くわせエサのグルテンを食わせること。ですから、バラケエサがナジまない、ナジんでもすぐ抜けてしまうのはNGです。ウドンセットとは違い、グルテンセットの場合はバラケエサが付いているときにアタらせるようにするのが基本です。ですから同じセット釣りでもウドンセット釣りとは違い、どちらかといえば共エサの釣りと同じような感覚で釣っていく釣り方と言えるでしょう。

タックルセッティング

エサをしっかり抱えてくれるパイプトップを使うことで確実にタナで釣るよう意識します。へら鮒の反応が悪いときは、ハリス段差を広げましょう。



軽いダンゴチックなブレンド

●バラケブレンド

「グルバラ」200 cc+
「段差バラケ」200 cc+
水 200 cc
「コウテン」200 cc+
「ふぶき」100 cc



+



+



+



+



●作り方

「グルバラ」200 cc、「段差バラケ」200 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注ぐ。15 回ほどかき混ぜ、そこへ「コウテン」200 cc、「ふぶき」100 cc、を入れ、20～30 回かき混ぜる。押し練りでエアーを抜き、エサが持つよう調整する。狙うタナが深い場合は、よりしっかりしたエサにして持たせるため、「ふぶき」を 200 ccにする。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

●くわせエサ

「わたグル」50 cc +
水 70 cc



●作り方

「わたグル」50 ccをグルテンボウルに入れそこに水70 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう20回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。グルテンだけで2目盛りぐらいのナジミ幅ができればOK。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝4号

●しっかりナジませる

ウキの動きがでないときは、エサがバラけすぎてしまいタナの魚量が少ないのでサワリやアタリがでないこともあります。そこで、今まで以上にバラケエサをタナに届けるようにします。押し練りを加える、しっかりハリ付けるなどして少しでもウキを深く入れるようにして、タナに魚を寄せるようにします。これで魚が近づくようになり、サワリやアタリが増えるはずです。

●アタリがでないときは……

サワリがあるのにアタリがでないときは、肝心のくわせエサが持っていない可能性があります。グルテンを押し練りしたり、手揉みしたりして確実に持つようにしましょう。

グルテンセットのチョーチン釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

バラケエサは、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくいものです。ですから、できあがったエサをそのままハリ付けすることはむずかしいのです。あまりエサをいじるなと言われますが、エサを持たせられなければ釣りが成立しません。まずは、押し練りをしてエアーを抜きまとめやすい状態にします。それをエサ付けてエサが持つかを見ます。もしこれで持たなければさらに押し練りを加えて、エサが持つ状態にします。まずは、エサを持たせること。ここからがスタートです。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か繰り返しながらかき混ぜる。接点を見つめよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



バラケエサは開く素材が多く、かき混ぜただけの状態ではまとまりにくい。

早春から始まる

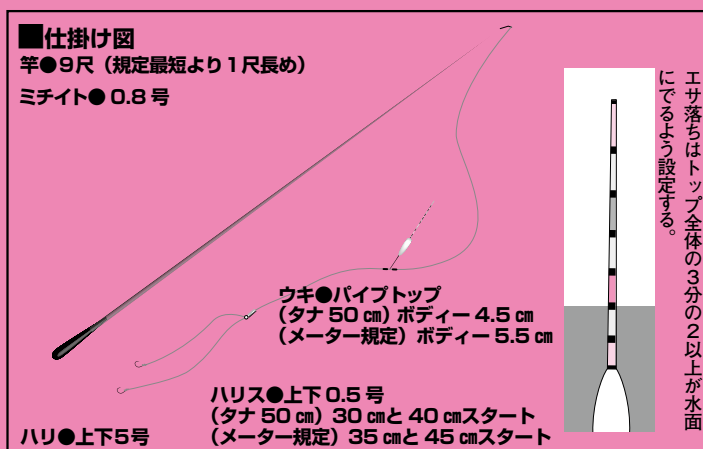
両ダンゴの 浅ダナ釣り

釣り方の基本

盛期の釣りの代表格である両ダンゴの浅ダナ釣りですが、シーズンによっては早春（3月頃）から釣れだすこともあります。ただ、最盛期とは違いへら鮎の寄りも少なく、活性もそれほど高くはないことが多いので、仕掛けやエサはワンランク落とした弱いものを使います。それでも釣り方の基本は同じ。一番重要なのはエサを持たせることです。ダンゴエサそのものを食わせる釣り方ですので、まずはエサが持っていなくては始まりません。エサの重さでウキのトップ先端までナジませるよう心がけましょう。また、盛期とは違いへら鮎の動きもゆっくりなことが多いので、しっかりナジんだところからじっとさせ、そのあとでサワリがでてアタリにつながるような動きが基本です。ひとつ付け加えるなら、この時季はへら鮎の寄りが盛期ほどでないので、寄せることを意識して、エサ打ちの回転を早くしましょう。

タックルセッティング

盛期の両ダンゴ釣りとは比べるとライトな設定。ウキは小さく、ハリスは長く、ハリが小さくとワンランク落としたところからスタートする。



軽くて持つ早春ブレンド

●エサブレンド

「ガッテン」200 cc+
「カルネバ」200 cc+
「浅ダナー本」100 cc+
水 100 cc



+



+



+



●作り方

「ガッテン」200 cc、「カルネバ」200 cc、「浅ダナー本」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エアー抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝5号

● タナを調整する

しばらくエサ打ちしても何の反応も得られないときは試しにタナを深くしてみよう。水温が低いとへら鮒は上層に上がってこないこともある。たとえメーター規定のある釣り場でも1mのタナで釣らなくてはいけないことはないので、少しずつ深くして1.5mぐらいのタナまで様子を見よう。逆に活性が高いときはタナを浅くします。タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすることで余計な動きが減り釣りやすくなります。

● ハリス調整

少しでも魚の反応を得たいのでスタート時の設定は長めにしています。これでアタリが多くでて、空振りやイトズレなどが目立つときは5cmずつ詰めてみよう。それでも空振りが多ければさらに5cm詰めていきます。もしハリスを詰めてアタリが減るようなら元の長さに戻すこと。動きが減ってしまうより動きがあるほうを優先しましょう。

● 手水は慎重に……

エサをやわらかくするために手水をすることもあるでしょう。手水と押し練りで調整という表現もありますが、まずはエサを持たせることが優先ですので、押し練りのみで調整します。硬くて持つエサで釣ればそれで問題ありません。強いアタリがでて空振るようならハリスを詰め、それでもカラツンが解消できないとき、濡らした手で押し練りをして少しだけエサのタッチをやわらかくします。やわらかいエサはエサ持ちが悪くなりますし、エサ付けも難しくなりますので、注意が必要です。

● 上手く釣れないときは……

しばらくエサ打ちしてもサワリやアタリがほとんどない、ウキが動かないときは、両ダンゴが成立しない状況と判断します。周りの釣れ具合を確認して浅ダナセット（4ページ）、チョーチンセット（8ページ）や段差の底釣り（12ページ）に切り替えましょう。

両ダンゴの浅ダナ釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。



写真右側がエサをかき混ぜただけの状態（基本エサ）。左上が押し練りを加えた状態。エアーを抜くことでエサが丸めやすくエサが持つようになる。打ち始めから押し練りを加えた状態から使い始めること。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



その戦術にジャストなサイズを。

ハリ持ちにも、大きさにもこだわった粒状くわせエサ



2024年
5月発売



繊細さが求められる
場面に最適

●カ玉ハード(S) 30g



2024年
5月発売



カバー領域が広い
スタンダードなサイズ

●カ玉ハード(M) 30g



暖季は宙釣りに、
冬季は段差の底釣りに

●カ玉ハード(L) 35g